

【報 告】

1. 第27回IHPトレーニングコース「気候変動下における統合流域管理」実施報告

Integrated Basin Management under Changing Climate

コンビナー：水資源環境研究センター 田中茂信，竹門康弘

2017年12月4日から15日の2週間にわたり第27回UNESCO IHP研修が京都大学防災研究所で行われた。本研修は、ユネスコ国際水文学計画（International Hydrological Programme: IHP）に協力して、名古屋大学宇宙地球環境研究所と京都大学防災研究所が共同で毎年2週間の研修コースを交互に実施しているもので、主にユネスコから推薦されたアジア地域からの研修生、名古屋大学、京都大学の大学院生等を受け入れている。研修目的は、水文学に係る観測・分析技術を習得することによって、各国の水文学に関する技術向上と水文環境の改善に貢献することにある。今回は、気候変動下における統合流域管理（Integrated Basin Management under Changing Climate）というテーマの下、1)気候変動が流域の水資源、水災害、生態系サービスへ与える影響についての知識を身に付けること、2)演習を通じて流域スケール降雨-流出-氾濫解析の具体的な手順を習得すること、そして3) 真に持続可能な社会を築くための統合的流域管理のあり方を考察することを目的とした。参加者はインドネシア、エジプト、オマーン、カンボジア、ソロモン諸島、中国、日本、パキスタン、ブルガリア、ベトナム、ミャンマー、モンゴルの12カ国17名であった。

第27回 UNESCO IHP 研修プログラム

月日	科目	講師
12月	カンントリーレポートの発表	田中茂信・竹門康弘
	基調講演 1 気候変動下において回復力ある社会への発展	寶 馨
4日	基調講演 2 気候変動が災害環境に及ぼす影響評価	中北英一
	講義 1 流域水文解析の基礎	立川康人
5日	講義 2 洪水頻度解析の基礎	田中茂信
	講義 3 降雨・流出・氾濫過程の基礎	佐山敬洋
6日	実習 1 降雨・流出・氾濫過程のモデリング(1)	佐山敬洋
	講義 4 陸面過程の基礎	田中賢治
7日	実習 2 地理・気象情報のデータ処理法(1)	田中賢治
	実習 3 地理・気象情報のデータ処理法(2)	田中賢治
8日	実習 4 降雨・流出・氾濫過程のモデリング(2)	佐山敬洋
9日	現地視察 琵琶湖・瀬田川洗堰・天ヶ瀬ダム・宇治川	竹門康弘
	講義 5 貯水池システムの最適操作に関する基礎知識	堀 智晴
11日	講義 6 貯水池運用の最適化	野原大督
	講義 7 貯水池の持続的利用のための総合土砂管理	角 哲也
12日	講義 8 河川生態系サービスの持続的利用対策	小林草平
	実習 5 宇治川の河床地形調査・生息場評価	小林草平・竹門康弘
13日	実習 6 木津川の河床地形調査・生息場評価	小林草平・竹門康弘
14日	実習 7 ダムの治水操作実験	角 哲也
15日	研修レポートの発表	田中茂信・竹門康弘

研修プログラム（表参照）は、2つの基調講演、8項目の講義、5項目の室内演習、2項目の野外実習、現地視察から構成され、水災害リスクマネジメントに関する幅広い分野を網羅するものとなるよう努めた。基調講演では、寶馨教授から「気候変動下において回復力のある社会への発展」と題する講義を、中北英一教授からは「気候変動が災害環境に及ぼす影響評価」と題して講義を行って頂いた。第1週には、流域スケール降雨-流出-氾濫解析および地理・気象情報のデータ処理法の具体的な手順を習得できるよう関連する講義および演習を集中的に実施し、研修終了までに研修生の解析対象流域の初歩的な解析ができるよう配慮した。また、第2週には、貯水池システムの運用と管理を中心に水資源・防災・生態系サービスの持続的利用のための調査研究手法を解説

した上で、宇治川と木津川で河床環境の現状評価手法の野外実習と治水ダム操作の室内実験を行った。現地視察では、天ヶ瀬ダム、南郷洗堰および琵琶湖博物館を訪問し、琵琶湖・淀川流域の河川環境の現状を見聞するとともに上下流問題などについての知見を深めた。

受講生は、講義・演習においては積極的に質疑を行うなど、終始熱心に取り組んだ。本研修コースは、持続可能な社会を築くための統合的流域管理のために必要な知識や技術の学びの場となると同時に、受講生同士や講師・受講生間の交流を深める貴重な機会にもなった。受講生の作成したレポートからは、本研修コースで得られた知識や経験を各国における実務やこれからのキャリアに活かそうという決意が示されていた。なお、第27回IHPトレーニングコースでは、世界展開力強化事業「気候変動下でのレジリエントな社会発展を担う国際インフラ人材育成プログラム」の支援を受けた。ここに厚く感謝の意を表す。気候変動下でのレジリエントな社会の実現に向け、本研修が少しでも貢献できたのであれば、主催者にとって幸甚である。

